「百枚めの写真」の場面＝トム・プロジェクト提供

-
-

太平洋戦争中、兵士を送り出した家族のくらしを描いた劇「百枚めの写真　一銭五厘たちの横丁」がこの夏、上演されている。戦地の兵士に届けるために撮影された９９枚の家族写真をめぐる物語だ。こんな写真がもう必要にならないように――。７３年前の写真に

写る男性は、そう願う。

出征する兵士を誇らしげに見送り、戦地からの手紙に小躍りし、戦死の知らせに声をあげて泣く――。物語は、下町のある家族を中心に進む。舞台では、実際に戦時中に撮られたモノクロの家族写真が、次々と映し出されていく。

原作はルポライター、故・児玉隆也さんの「一銭五厘たちの横丁」。児玉さんは、戦地の兵士を激励するため、在郷軍人会が１９４３年に東京都内各地で撮った家族写真９９枚を入手。７０年代、写真を手がかりに家族を訪ね歩き、戦中・戦後のくらしぶりを聞き取って本にした。一銭五厘は戦中のはがきの値段で、赤紙（召集令状）を意味する。

劇を手がけたのは演劇企画制作会社のトム・プロジェクト。代表の岡田潔さん（７０）は「原作を読んで強くひかれた」と話す。今年２月に９７歳で亡くなった母からは、ソ連兵の暴行におびえながら顔に炭を塗って夜道を逃げた引き揚げの体験を聞かされた。「戦争は、勝っても負けてもみじめ」。そんな言葉が耳に残る。

岡田さん自身は戦後、親の引き揚げ先の福岡県・博多で生まれた。「戦争体験者はやがていなくなる。当時の庶民の声を芝居で表現することで、次世代に経験をつなぎたい」と言う。

出征兵士の母役を演じる俳優の大西多摩恵さん（６２）は、母（９４）が東京大空襲を体験したという。「若い人にも共感してもらえるような家族を演じたい」

７月上旬に東京で始まった公演は各地を回り、再び「終戦の日」の１５日から３日間、東京・六本木の俳優座劇場で行われる。

■７３年前、叔父に送るため撮影　当時７歳の鵜飼さん

東京都台東区で酒店「三河屋」を営む鵜飼英一さん（８０）は、撮影された９９枚の写真に写った一人だ。当時７歳。今と同じ場所の店先で自転車にまたがり、白い歯を見せて笑っている。鵜飼さんの両親、きょうだい、近所の子たちの姿も。横には配給品のビールが積まれている。叔父の末雄さんに送るための撮影だったという。

末雄さんは終戦間際に南方で戦死した。生前の末雄さんから手紙は送られてきたが、家族写真が末雄さんに届いたかは不明だ。写真の中で鵜飼さんと身を寄せ合っていた祖母は、戦後すぐに隅田川に身を投げた。親族たちは、末雄さんの死を悲しんでのことだと受け止めたという。

１９０１年創業の三河屋は鵜飼さんが３代目。焼け野原となった東京の街はみるみる復興し、店の周りの景色も一変した。住民も入れ替わり、戦地に送られた家族写真のことを知る人も少なくなってきた。

「写真を撮ったころの自分は兵隊に憧れ、『鬼畜米英』が当然の時代だった。そんな時代には、二度としちゃいけないと思う」

７３年前の写真は、いまも店の壁に飾っている。

（岩崎生之助）